



實演童話

熊に追はれた健ちゃん

萱野城還

右を見てもお山左を見てもお山、前も後もすつかり山で囲まれた小さい村がござりました。村にはお家も云ふに僅か二十軒ばかりしかありませんが村の中はいつてもニコニコ働きものばかりです。健ちゃんのおうちはこの村の真中にありました。健ちゃんのおうちには今年もう六十の坂をこしたおぢいさん、それから健ちゃんの大すきなおばあさんがあるだけでお父さんやお母さんは健ちゃんはまだ少さい時分に無くなつて終つたのですが、今ではこうして、おぢいさんやおばあさんに可愛がられて何不自由なく活してをりました。

おぢいさんの仕事は毎日朝早くから鐵砲をかたに裏のお山へ登つて猪や熊をドカンこうつてそれを持つて歸る事でした。元氣なおぢいさんは毎朝起きると、きまつた様に裏庭へ出るに氣持よく晴れた東のお山に向つて大きな深呼吸をします、おぢいさんの體一杯に朝日がキラキ

ラミ輝いてそれはまぶしい位です。その時には健ちゃんもきつと一緒にうら庭へ出るのでした

× × × × ×

或る日の事ですそれはもう手もこぎえるばかりの寒い朝でした昨夜から降りしきつた雪はもう七八寸もつてゐます、四方をこり圍んだ山々はすつかり眞白にお化粧して冬がれに、さびれた木この稍も今日ばかりは、おしろいの花を咲かせた様です。時々バサツ云ふ音をたて、笹の葉から雪のかたまりの落るのが聞えました。

「ねえお爺さん今日はこんなに雪が降つてゐるんですから一日ゆつくり炬燵にでも入つて息みませうね」

「そうだなあこんなに雪がつもつてゐるんだから山へ登るのも大變だ今日は一日やすむかな」

「お爺さんそれがよろしいよオ、寒いオヤ寒い筈だよお爺さん障子にこんな大きな穴があいてさ、そうく屏

風をたてませうオツトドツコイさあこれで大丈夫もう風なんか入りませんよ

「いや御苦勞／＼それで暖かく、なつたよ、ついでにばあさんやイロリに木ももう少し入れてくれないか、まだ何だかゾク／＼する様だから」

「おやお爺さんたら、なんて寒がり屋なんでせう、ぢやくべますよ、まきをホラ一ツ二ツ三ツ、さうです暖かになりましたか」

「今入れたばかりぢやないか、そんなにすぐに暖かくなるもんかい。……オヤ……ホ……バチ／＼いつてきたべ、その響をきく／＼何だか急に暖かになつた様な氣がするぞ」

「まあ、あんな事いつて、お爺さん今のバチ／＼はありや臺所のイリ豆のハゼた音ですよ」

「何だいイリ豆の音か！わしや又木の燃る音かと思つたよは……時にばあさんや健坊は？」

「健ちやんなら裏に居ますよ、健やん／＼おばあさんに呼ばれて健ちやんが入つて來ました。」

「僕雪だるま、こしらへてるんだよホラーおあんな大きなのを」

「つめたいから雪なんか早くすて／＼おちいさんの所へお

行き」

健ちやんは右手に持つてゐた雪のかたまりを庭へなけ出す／＼、そのまゝお爺さんのそばへ來ました、

「あゝ健坊きたか、さあこれから、いつもの様にお佛壇に御光りをおけやう」

「おちいさん僕がお蠟燭をあげるよ」

健ちやんはおちいさん／＼一緒にいつもこうして御佛様にお蠟燭やお線香をあけます、そしてお佛壇の前にきちんと坐る／＼可愛い／＼お手にを合せました、おちいさんは健ちやんのこうした姿をみるのが一番嬉しかったのです。

「なあ健坊やこうして御佛様や御先祖をおまつりする事を忘れてはいけないよ、世の中には御先祖様をおまつりする事の出来ない人や又それが出来てもお祭りしない人があるんだ。だがそんな人はこの世の中で一番不幸な人なんだよ」

「ね、おちいさん御佛様や御先祖様を、おまつりする事がそんなに大切な事なの」

「あゝ大切だ／＼も健ちやんはこうやつていつもおちいちゃん／＼一緒に御先祖様を大切に／＼してゐるから御先祖様が、きつ／＼健ちやんを立派な人にして下さるよ、そして健ちやんの體にはいつも御佛様がついていて下さるよ」

御佛壇の前でおぢいさんミ健ちやが話してゐる時でした  
「今日は。おぢいさん家にいるかね」

入つてきたのはいつもおぢいさんが狩に出る時れつだつてゆく權三さんです。

「いよ權三さんぢやないか、イヤお早う」サア／＼こちらへお入り、おや／＼この寒いのに鐵砲をかついで、お前さん今日も獵に出かけるつもりかい。

「つもりかいつて、おぢいさんは？」

「わしかい、わしや今日はこんなに寒いんだから一日ゆつくり休むつもりだよ」

「何だい折角さそひに來たのに、そんな事云はないで一緒に出かけ様今日あたりは兎はピョン／＼はねてゐるし猪だつてきつミ澤山出てくるよ」

權三さんの話をきいてゐた健ちやんが飛出しました。

「ねえおぢさん、おぢいちゃんのだりに僕つれてつてよね」

「いよ／＼健坊ぢやないか、いつも元氣だね、だが健坊今日は駄目だよ、もつミおてん氣のい／＼日につれてつてやらうね」

「そんな事云はないで僕今日雪がつもつてるから行き度いんだよ、ね、僕一生懸命山を登るから」

「大丈夫かい」

さう／＼おぢいさんの伏りに健ちやんがお山へゆく事になりました。

健ちやんは權三おぢさんに負けない様にドン／＼山に登つてゆきます、谷も涯も雪でたゞまつ白ですサツミ雪が走つたかと思ふミそれは兎でした。

「ソラ健坊兎だツ」

權三おぢさんがさう云つてゐるミ今度は猪が飛出しました、ドカン權三おぢさんの鐵砲から煙が出ます健ちやんはもう嬉しくて／＼たまりません。

「健ちやんさうだいこの猪は、さあこれはおぢいさんのおみやげだよ」

するミ又雪の白兎です。

「おぢさん今度は僕か兎をつかまへるよ」

健ちやんはさう云つたかと思ふミ兎のあミを追つて走りました。雪のかたまりミ健ちやんの競争です。

「イヨシッカリ／＼健坊まけるな」

權三さんもそれについて走りました

權三さんが教姿をみてゐるミ健ちやんが一本松の側まで走つた時でした、不意に物かけから黒いものが飛出しました、「アツ熊だツ」おぎろいたのは權三おぢさすです、熊は兎も追つてゐる健ちやんの渡をノソリ／＼みつけてゆきます、健ちやんミ熊の間がだん／＼近づいて行きま

す。

「もう駄目だヨーシあの熊を」

そう云つたかと思ふに權三さんは肩の銃をはづさ、ねらひを定めました、權三さんの指が引金にかゝるやドカン山にこだまして大きく銃聲が轟きました、それと同時に向ふに見えてゐた健ちゃんの體がコマの様にキリキリ二三度廻つたかと思ふに、そのまゝ谷間に雪なだれと共に消えてゆきました。

× × × × ×

「シマツタ！ あまりの有様に只ぐんやりこした權三さんもハツミ我にかへるミ銃を投げすてゝ今健ちゃんの落込んだ涯へかけつけましたが、そこにはもう健ちゃんの姿は見當りません

「大變な事をして丁つた、そつだ村へ歸つて手をかして貰はう」。

權三さんは到底自分ではさがせないミ氣がつくミ、きびすをかへして山を下りました

權三さんからこの事をきいたおちいさんは驚ろいて村人達と一緒に山路を急ぎました。けれど何しろ一面雪の山でそれに熊の出る位の山ですから健ちゃんの落た處が容易に分りません、あちらの涯こちらの谷ミ方々手を分けて探しますが一同に健ちゃんの姿が見えません。

「健ちゃんヤーイ〜」

村人は口々に健ちゃんの名を呼びましたが答がありません、おちいさんはつかれた體を一本松の切りかぶにドツカミ下しました。

「アーこんなに、さがしても健坊の姿が見えないもう駄目か？」

首をうなだれたおちいさんが、ふミ前をみるミそこに何か赤い布の様なものが落てるます、おちいさんが拾つてみるミ、それは健ちゃんがいづも肌身離さずもつてゐた觀音様のお守りです

あゝこりや健坊のお守りだ

「さうだこゝにこのお守りが落ちてゐるからには、きつミ健坊はこの下へ落ちたのに違ひない、サア村の衆や手をかして下され」

おちいさんは村人と一緒に崖を下りてあちらこちら、さがしますミ雪の中に健ちゃんの體が横はつてゐました。

「健坊やしつかりしておくれ、おちいちゃんだよ健坊々々」

おちいさんは健ちゃんの體をだき起しました

× × × × ×

村人の手をかりて健ちゃんの體はお家へ運ばれましたミところが不思議な事に、たしかに權三さんの弾に當つて

涯へ落ちた筈のち健やんの體に、かすりきず一ツありません。

おぢいさんもおばさんも不思議でなりません、だがこれ云ふのも日頃健ちやんがみ佛様をおうやまひし、御先祖様を大切にしたので、きつゝ御佛様が健ちやんの

體をお守り下さつたのに違ひなひ、そう思ふとおばさんは走りよつて御佛壇の扉を開きました。静かに手を合せたおばさんの臉にあつてい涙が光つてゐます。

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。